

愛子さんの

まえがき

きかせて

この一冊は、愛子さんが、

あなたのために、

五十二週かけて語ったものです。

目次

第一章	土間のおい
第二章	夏休みの、あさ
第三章	はじめての給料
第四章	ようかんを三切れ
第五章	ふたりの所帯
第六章	ミシンの音
第七章	お茶はまた沸かせばいい
第八章	母から受け継いだもの
第九章	いまの日課
第十章	手放してよかったもの
巻末	めぐみさんへ

第一章

土間のおい

子どものころ、住んでいた家のことをきかせてください。どんな家で、どんな匂いがありましたか。

在所の平屋だった。土間があつて、雨の日は土の匂いがした。祖母がいつも竈のまえにいて、わたしはその背中で育ったようなものだ。夕方になると、味噌汁の湯気と、薪のはぜる音がして、それが晩ごはんの合図だった。いまでも雨のおいをかぐと、あの土間に立っている気がして、困ったものだ。



昭和38年ごろ・生家のまえで

おばあさまのことで、いちばん覚えている手つきは、どんなものですか。

祖母は火吹き竹の名人だった。わたしが吹くと灰が舞うだけなのに、祖母が吹くと、ぽっと火がついた。「火はせかしたらいかん」と言っていた。急いで吹くと消える。待って、頃合いで、そっと。人もおなじだと、あとになって何度も思った。娘にも、お針の弟子にも、じぶん自身にも、この言葉はよく効いた。祖母の手は小さくて、固くて、あたたかかった。あの手のことは、たぶん死ぬまで覚えている。

きょうだいとは、なにをして遊びましたか。

兄と土間で独楽をまわして、敷居を越えたら祖母に叱られた。女の子が独楽なんて、と言う人もいたけれど、祖母は笑って見ていた。兄の独楽はよくまわった。わたしのはすぐ倒れた。悔しくて、夜なべで紐の巻き方を練習した。はじめて兄に勝った日、兄は「まぐれだ」と言って三度やり直させて、三度ともわたしが勝った。兄はだまって独楽をしまつて、それから、笑っていた。

雨の日は、家でなにをしていましたか。

雨の日は、祖母のとなりで針を持った。端切れて、
お手玉やら、人形の着物やら。糸のおしかたも、
玉結びも、ぜんぶあの土間で覚えた。できあがった
お手玉はふどろいだったが、祖母は黙って仏壇にそ
なえてくれた。何も言わない人だったが、ああいう
褒め方があるのだと、いまはわかる。



生家の、囲炉裏のまえで

子どものころ、いちばん安心した場所はどこですか。

夏の夜は蚊帳のなかで、家族みんなで寝た。蚊帳ごしに見る裸電球が、ぼんやり
にじんで、きれいだった。父のいびきと、遠くの蛙の声と、だれかの寝返りの
音。こわい夢を見ても、目をあけさえすれば、みんながいた。あれがわたしの、
いちばん古い安心の記憶かもしれない。安心というのは、たぶん、音でできている。
る。

第二章

夏休みの、あさ

夏休みの朝、さいしょにしたことはなんですか。

夏休みの朝は、神社のラジオ体操からはじまった。眠い目をこすって、はんこをもらいに行く。首から下げたカードの、はんこが増えていくのがうれしかった。帰り道の、まだ涼しい風のおい。露をふんだ下駄の湿り。あの時間の空気は、いまの夏には、もう無いような気がする。

泳いだ川の、覚えている景色をきかせてください。

近所の川で、日が暮れるまで泳いだ。女の子は浅いほう、と決まっていたが、わたしは兄について深いほうへ行って、よく叱られた。くちびるが紫になるまで遊んで、家に帰ると、井戸で冷やした麦茶が待っていた。あの麦茶より、うまい飲みものには、まだ会っていない。



よく泳いだ、近所の川

夏の食べものの思い出を、ひとつだけ。

西瓜は井戸で冷やした。切るのは祖父の役目で、いちばん大きいのは、なぜかいつも末っ子のわたしにくれた。兄は文句を言わなかった。言わなかった理由が、じぶんが親になってからわかった。種を庭に吹き飛ばして、母に「行儀がわるい」と叱られるまでが、ひと夏の決まりごとだった。翌年、庭のすみに西瓜の芽が出て、家じゅうで笑った。

宿題は、どうやって片づけていましたか。

絵日記は、八月の終わりにまとめて書いた。天気がわからなくて、兄と口裏を合わせた。晴れが続きすぎるのも怪しいと、二日だけ雨にした。あれは共同作業というやつで、いま思えば、兄といちばん仲がよかったのは、八月三十一日だったかもしれない。悪だくみというのは、人を仲良うさせる。よい子には内緒の話だ。

お祭りの夜のこととて、覚えている音はどんな音ですか。

祭りの夜は、下駄の音が町じゅうに鳴った。よそいきの浴衣は、祖母が縫ってくれた一枚きり。綿菓子を買ってもらえるのは、年に一度。口のまわりを砂糖だらけにして帰る道、父の背中は大きくて、提灯のあかりで長い影がのびていた。あの夜が、わたしの知っている、いちばん古い「にぎやか」だ。

第三章

はじめての給料

はじめての仕事の、さいしょの日。いちばん覚えているのは、どんな場面ですか。

はじめての仕事は、縫製工場だった。さいしょの日、お師匠さんに「まっすぐ縫えるまで、ミシンにさわらなくていい」と言われて、ひと月、しつけ糸と裁ち場ばかり。悔しくて、夜に新聞紙を手で縫った。あの晩の指のいたさは、いまでも覚えている。あとで知ったが、あれは腕でなく、辛抱を見ていたらしい。

はじめてのお給料、何に使いましたか。

銀行の封筒のまま、母に渡した。中を見ずに、母はそれを仏壇に置いた。手を合わせてから、千円だけ抜いて、わたしに返した。「これはあんたの分」と言うて。あの千円で何を買ったか、じつは覚えていない。覚えているのは、母の背中和、線香のにおいだけだ。

仕事をおしえてくれた人は、どんな人でしたか。

お師匠さんは口がきびしくて、針目にはもつときびしくて、それでいて、だれよりも布にやさしかった。「布は嘘をつかないよ。ごまかすのは、手のほう」が口癖で、わたしはこの言葉を、五十年使っている。娘にも言った。孫にはまだ言うていない。いつか言う。

わかいころの失敗で、いまも覚えているのは、どんなことですか。

注文の上着を一枚、寸法をまちがえて裁った。高い生地だった。青くなってお師匠さんに言いに行ったら、「よく、自分から言いに来た」とだけ言われた。叱られなかったことが、いちばんこたえた。それから、裁つ前に三度ばかり癖がついた。この癖には、その後の五十年、何度も助けられた。

じぶんのお金ではじめて買った、じぶんのための物はなんですか。

三月ためて、細い腕時計を買った。はじめて自分のお金で買った、じぶんのための物だった。うれしくて、眠るときも外さなかった。文字盤に傷がついた日は、ごはんがのどを通らなかった。あの時計は、いまでも引き出しの中で動いている。



はじめての腕時計

第四章

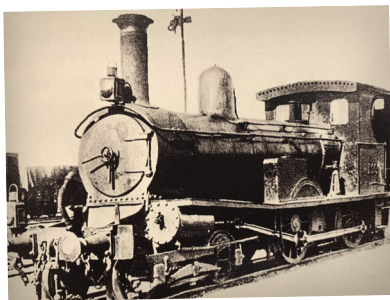
ようかんを三切れ

お父さんと、はじめて会った日のことをきかせてください。

見合いの席で、わたしは、ようかんを三切れ食べた。緊張していなかったわけではない。緊張すると食べるたちなのだ。仲人がまっ青な顔をしていたが、あの人はあとになって、「ようかんを三切れ食べる人となら、めしがうまかろうと思った」と言った。それがはじまりだった。

家を出た日、だれが見送ってくれましたか。

嫁ぐ日、駅のホームで母に見送られた。母は改札から出てこずに、柱のかげで手を振っていた。母はその日、新しい前掛けをしていた。電車が動いてから、わたしははじめて、家を出るということの意味がわかった。



嫁いだ日の、駅

ふたりで、はじめて出かけた場所はどこですか。

二度目は、駅前の喫茶店だった。あの人はコーヒーなんて飲み慣れないくせに、砂糖を四杯も入れて、すましていた。おかしくて笑ったら、つられて笑った。その笑い方で、この人と一緒になるんだろうかと、こっちが先にわかってしまった。帰り道は、遠回りをした。

はなれていたあいだ、どうやって連絡をとっていましたか。

式までの半年、はがきが来た。天気と、めしの中身ばかり。「雨」の字がやたら多い、へたな字のはがきである。ぜんぶ取ってある。天気の話が四十枚。いまま思えば、あれが恋文というものだったらしい。書いた本人だけが、気づいていなかった。

第五章

ふたりの所帯

ふたりの暮らしは、どんな部屋からはじまりましたか。

所帯は、六畳一間からはじまった。家財は布団と、ちゃぶ台と、鍋がふたつ。わたしは窓に手ぬぐいの暖簾をかけて、「これでうちらしくなった」と言った。あの人がそれを見て、はじめて家のなかで笑った。うちというのは、物じゃないと、あの日に知った。家賃は一万二千円だった。いちばん狭くて、いちばん覚えていた部屋である。

最初のけんかは、なにがきっかけてしたか。

最初の喧嘩は、味噌汁の濃さだった。わたしの味は母の味で、あの人の味は向この家の味だった。どちらも譲らずに、三日口をきかなかった。四日目の朝、わたしは、ちょうど中間の味噌汁を出した。あの人はうまいと言った。わたしは「あんたが謝ったことにしとく」と言った。ふたりの味は、あれからはじまつた。

お子さんが生まれた日のことを、きかせてください。

めぐみが生まれた朝のことは、じつはあんまり覚えていない。痛かったことと、産声と、看護婦さんの「元気な女の子ですよ」だけ。抱かせてもらったら、かろいのに、腕が震えた。あの重さは、目方じゃなかったんだと思う。廊下では、あの人が立ったまま寝ていたそうだ。

子育てで、いちばん大変だったのは、どんな夜でしたか。

めぐみは夜泣きのひどい子で、ふたりで交代であやした。おんぶして夜道を歩くと、なぜか静かになる。月を見ながら、ずいぶん歩いた。近所の犬と顔なじみになるほど歩いた。あの夜道は、しんどかったはずなのに、思い出はぜんぶ、やわらかい。しんどさは忘れて、月だけ覚えていて。人間は、うまいことできている。

家を建てた日のことで、覚えている場面をひとつ。

三十四のとき、小さい家を建てた。柱にめぐみの背丈を刻んだ。引っ越しの日、わたしが真っ先にしたのは、また窓に暖簾をかけることだった。六畳一間のあの暖簾は、いまでも箆笥にしまっている。

第六章

ミシンの音

子育てのあいだ、どんな仕事をしてきましたか。

めぐみが小学校にあがったところから、家で洋裁の内職をはじめた。夜、ミシンを踏むと、めぐみがその音で眠った。「ミシンの音がすると安心する」と、大人になっても言う。あの音で、家計と、子どもの寝息の、両方を支えていたのだ。

じぶんのお店をもった日のことをきかせてください。

四十二のとき、駅の近くに三坪の洋裁店を出した。看板は、あの人が書いた。へたな字だった。へたな字ね、と言ったら、「味だがね」と言った。あの看板は、店をしめた日に外して、いまでも物置にある。

お店には、どんなお客さんが来ましたか。

直しの客がほとんどだった。丈つめ、幅出し、ほころび。人の暮らしは、寸法が
変わりつづける。子どもは伸びるし、年寄りも縮む。針を動かしながら、ずいぶ
んいろんな身の上話を聞いた。洋裁店というのは、半分は、話を聞く商売であ
る。

お店をしめた日のことを、きかせてください。

既製服が安くなって、直すより買うほうが早い時代になった。店をしめると決めた晩は、だれにも言わずに、ひとりでミシンをぜんぶ拭いた。時代のせいだと人は言ってくれたが、決断の遅さは、わたしのせいでもあった。それは自分が、いちばんよく知っている。

そのあと、ミシンはどうしましたか。

ミシンは一台だけ、家に持って帰った。いまでも、孫のズボンの丈をつめるのはわたしの役目だ。針に糸をおすのだけ、老眼で難儀するので、あの人が黙ってとおしてくれる。五十年踏んで、まだ現役だ。ミシンも、わたしも。

第七章

お茶はまた沸かせばいい

はじめてふたりで山にのぼった日のことを、きかせてください。

はじめてふたりで山にのぼった日、わたしは、しろい水筒を峠に忘れた。とりに戻ると言うあの人に、
「お茶はまた沸かせばいい」と笑って言った。ほんとうは、強がりだった。あとで聞けば、あの人はあの一言で、一緒になろうと決めたのだそうだ。強がりも、たまには役に立つ。



はじめての、ふたり山

結婚二十五年目は、どんなふうにすごしましたか。

銀婚式は、なにもしなかった。かわりに、あの峠にもういっぺんのぼった。のぼる速さだけが、若いころとちがった。わたしは新しい水筒を、わざわざ白いのにして持っていった。「今度は忘れんよ」と言って。峠で飲んだ茶は、二十五年ぶんの味がした。帰り道、どちらからともなく、また来ようと言った。

お父さんが入院したとき、家はどうでしたか。

あの人が胆石で入院したとき、家が、へんに広がった。だれの茶碗も洗わない朝というのは、手持ちぶさたなものだ。煮物を作りすぎては病院に持って行って、看護婦さんに笑われた。退院の日、「うちのごはんが、いちばんだ」と言われて、それで、ぜんぶ足りた。

いま、ふたりでつづけている習慣はなんですか。

いまは朝の散歩を、ふたりでしている。話すことなんて、もうあんまり無い。無いのに、隣にいないと調子が出ない。金木屋の角を曲がって、橋を渡って、神社で一礼して帰る。五十年かけて、会話は相槌だけで足りるようになった。あれは倦怠ではない。進歩だと思っている。

お父さんの手を、さいごにじつと見たのは、いつですか。

このあいだ、ふと、あの人の手を見た。節と、しみと、指の曲がり。その手がしてきたことを、わたしはぜんぶ知っている。働きものの手ね、と口に出して言ったら、「気持ちわるい」と言われた。おたがいさまだ。



働きものの手

第八章

母から受け継いだもの

ご両親から受け継いだと思うものは、なんですか。かたちのあるものでも、ないものでも。

朝いちばんに仏壇に手を合わせるのは、母のしぐさのままだ。線香に火をつけて、りんを一つ鳴らす。何を祈っているのかは、じつはよくわからない。報告のような、挨拶のような。ただ、あの線香のにおいで一日がはじまると、背筋がまっすぐになる。両親から受け継いだものは、たぶん、この背筋である。

お母さまの料理で、いまでも思い出す味はなんですか。

母の味噌汁は、煮干しの頭を取らなかった。「頭にも出汁がある」と言って。すこし苦いのが、母の味だった。その味があの人のお家の味と混ざって、いまのうちの味になっている。めぐみの家で味噌汁を飲んだら、その味が、また少し変わっていた。受け継ぐというのは、こういう混ざり方のことかもしれない。

かたみの品で、いまでも使っているものはなんですか。

形見にもらったのは、裁ち鋏がひとつ。母は夜なべに、これで子どもらの服をよく直していた。わたしが洋裁を仕事にしたのは、この鋏のせいかもしれない。研ぎに出しながら、いまでも使っている。道具は使うのが供養だと、お師匠さんも言っていた。研ぎ屋の親父に「いい鋏だ」と言われるたび、母が褒められた気になる。



母の裁ち鋏

お母さまの口癖は、なんでしたか。

母の口癖は、「お天道さまが、見てるよ」だった。子どものころは怖い言葉だと思っていた。見張られとるようで。いまはちがう。だれも見えていなくても、ちゃんとやる。見ていてくれる人がある、という意味だったのだと思う。それだけのことを、母は一生かけて、背中で教えてくれた。

ありがとうございますを言いそびれている人がいたら、その人のことをきかせてください。

ありがとうございますを言いそびれたのは、母にだ。言う機会は、いくらでもあった。照れくさいまま、間に合わなかった。だからこの一冊を作っている、というところ
が、正直、ある。言える相手には、言えるうちに。それがわたしの、数少ない助言だ。この頁を読んでいるあなたにも、だれか、おるだろう。

第九章

いまの日課

あさ起きて、さいしょにすることはなんですか。

朝は五時に目が覚める。目覚ましは、もう何年も鳴らしたことがない。仏壇に手を合わせて、湯をわかして、新聞をすみからすみまで読む。だれに頼まれたわけでもないが、五十年続けていると、これをせんと一日がはじまらない。日課というのは、じぶんとの約束だ。

いま、そだてているものはなんですか。

裏の畑で、茄子と胡瓜を作っている。売るほどき
るので、ご近所に配ってまわる。「愛子さんのきゅ
うりは、曲がつてるけどおいしい」というのが、近
ごろいちばんの誉め言葉だ。配る先の顔ぶれで、季
節の体調が、だいたいわかる。



裏の畑・去年の夏

きのうの晩ごはんは、なんでしたか。

きのうの晩は、鰯の梅煮を炊いた。骨までやわらかく炊くのが、わたしの自慢である。あの人がうまいうまいと二匹食べるので、「あんた、先週も同じこと言ったよ」と言ってやった。先週も言ったなら、二週続けてうまいということである。同じ物を、同じだけうまいと言ってくれる人がおる。それがいちばん、ぜいたくだと思う。

お孫さんとは、どんな話をしますか。

孫が週に一度、電話をくれる。用事はたいてい無い。「ばあちゃん、元気？」
で、だいたい終わる。それでいい。用事のない電話ほど、ありがたいものはな
い。電話を切ったあと、あの人と「元気だそうだ」と言い合うまでが、うちの行
事だ。行事は、多いほうがいい。

さいきん、うれしかったことを、ひとつだけかせてください。

最近うれしかったのは、朝顔が二階まで届いたことだ。五月に孫と植えた種である。「ばあちゃんち、まだのびる？」と電話が来るので、毎朝、見回りが忙しい。花が咲いたら写真を送る約束をしとる。約束というのは、いくつになっても、朝を楽しみにさせる。

第十章

手放してよかったもの

人生で、手放してよかったものはなんですか。

手放してよかったのは、よそさまと比べる癖だ。若いころは、人の家の暮らしぶりが、気になって仕方なかった。店をしめたとき、いつしよに捨てた。比べなくなったら、うちにあるものが、よく見えるようになった。あれは不思議だった。

比べる癖は、目隠しだったらしい。

暮らしのなかで、思いきってやめたことをきかせてください。

七十で、車を返した。不便にはなったが、歩くようになって、町の景色が増えた。よそんちの金木犀のにおいで、秋に気づく。車に乗っていたころは、秋はにおわなかった。歩く速さでしか、見えないものがある。



長く乗った車

むかしのじぶんの、なおしたかったところはどこですか。

若いころは、察してほしい、と思うたちだった。言わんでもわかるはずだと、ひとりで腹を立てていた。あるときめぐみに「言わなきゃ、わからないよ」と言われて、目がさめた。言うようにしたら、家のなかの天気がよくなった。娘に教わることも、あるのだ。

これだけは守ってきた、という自分のルール。ひとつあげるなら、なんですか。

これだけは守ってきたのは、「呼ばれたら、行く」だ。葬式も、祝いごと、頼まれごと。おつくうな日も、行った。行けば、たいてい何かの役に立てるし、行かねば、それきりになる縁がある。行かなかった後悔は重い、行った後悔は、七十年あまり生きて、まだ一度もしたことがない。

めぐみさんへあなたが嫁ぐ日にくれた手紙は、いまでも筆筒のひきだしに入っています。返事を書かないまま、二十年がたちました。この一冊を、その返事にします。

あなたが生まれた朝のことも、ミシンの音のことも、ぜんぶ話しました。あなたの知らないわたしが、ずいぶんいたでしょう。

一年間、週にひとつの質問に答えるのは、針を運ぶのに似ていました。ひと針ずつしか、進めないの。でも、ひと針ずつなら、どこまでも縫えるの。

——ありがとう。今度は、わたしから先に言います。

この一冊を、まえがきと呼ぶのは、

話が、ここで終わらないからです。

つづきは、読んだあなたの中に。

き か せ て

週にひとつの質問から、この一冊はできました。

この冊子は、組版と写真配置の見本です。

登場する人物・地名・文章はすべて架空のものです。

実際の一冊は、語り手ご本人の言葉だけで編まれます。